

## 平和と戦争をめぐる二人のイスラーム教徒 —オサマ・ビン・ラディンとフェトフッラー・ギュレン

大川 玲子  
(明治学院大学)

### はじめに：イスラームと戦争／平和

宗教と平和・戦争を結びつける議論は、日本でも数多くなされてきた。宗教に起因すると見られる戦争が起これば、「宗教は平和を求めはずなのにおかしい」という論調がしばしば聞かれる。これに対して「やはり宗教が平和を乱す諸悪の根源だ」という主張もよく耳にする<sup>(1)</sup>。この二つの論調は相反するものであり、その背後には、日本の宗教観の独自さが透けて見える。多くの日本人は古来のカミ概念をゆるやかに継承しているが、特定の宗教・宗派に属しているとは認識せずに日々を過ごしている。つまり宗教概念が希薄なのであり、それが先ほど述べた二つの対照的な論調を生み出すのだろう。もし自分が特定の宗教・宗派に属すると認識しているならば、当然その歴史のなかには異教徒との戦争の時期もあり、また平和共存が可能であった時もあったことを、知らざるを得ない。そして宗教は戦争と平和を包含するものだという前提をもつことができるはずなのである。

昨今のイスラームをめぐる認識は、このような日本人独特の宗教観の一つの帰結だと言えるであろう。特に2001年のアメリカ同時多発テロ事件、いわゆる911に始まり、現在進行中の「アラブの

春」以降の動乱が、日本人に「イスラームと戦争」が常態であり、「イスラームと平和」は不可能であるかのような印象を与え続けている。もちろん911以前のいくつもの戦争も、この印象に拍車をかけていることは言うまでもない。筆者もイスラームを研究する者として、「イスラームの人たちは理由がなくても異教徒を見ると殺害する。解決策はあるのですか」や、「コーランに書いていることが間違っているのではないですか」、「宗教は世界平和のためにあるのに、イスラームは戦争ばかりしている。イスラームは宗教ではないのではないですか」といった質問を受けることがしばしばある。これらの設問には情報不足や思い込みが含まれている。このことは、日本においてイスラームについて理解することがいかに難しいかをあらためて感じさせてくれる。

さらに日本においてはムスリムの数が少ないことも、日本人の宗教観形成に大きな影響を与えているであろう。日本では、オサマ・ビン・ラディン（ウサーマ・ビン・ラーディン）に代表される好戦的で残虐なテロリストのイメージが先行している。しかし歴史的にイスラーム教徒を少数者として内包してきた国では、このようなイメージを鵜呑みにしないことがある。例えば中国やカンボジアなどで筆者が<sup>(2)</sup>、日本や欧米ではムスリムと言えばテロリストと考える風潮があるが、とい

う話をすると笑って否定される。自国のムスリムは古くから隣に住んでいる人たちに過ぎないと。これは新しく移民として入ってきたムスリムではなく、古くから共存してきた歴史による相互理解の成果であり、このような社会もあるということを知ることは、日本人とっても重要であろう。

さて以上のような状況をふまえ、本稿で論じたいのは、宗教とは平和と戦争を合わせもつものであり、それを選択するのは信徒しかいない、ということである。分かりやすい例を挙げたい。非暴力・不服従・市民的抵抗で知られたマハトマ・ガンジー（1869-1948年）の座右の書はヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』（叙事詩『マハーバーラタ』の一部）であるが、この聖典には次のような記述が含まれている。

更にまた、あなたは自己の義務<sup>ダールマ</sup>を考慮しても、戦慄<sup>おのの</sup>すべきではない。というのは、クシャトリヤ（王族、士族）にとって、義務に基づく戦いに勝るものは他にないから。・・・あなたは殺されれば天界を得、勝利すれば地上を享受するであろう。それ故、アルジュナ、立ち上がれ。戦う決意をして（上村訳2013：37）。

それ故、立ち上がれ。名声を得よ。敵を征服して、繁栄する王国を享受せよ。彼らはまさに私によって、前もって殺されているのだ。あなたは単なる機会（道具）となれ。アルジュナ。ドローナ、ビーシュマ、ジャヤッドラタ、カルナ、及びその他の勇士たちは、私により殺されているのだが、あなたは彼らを殺せ。いてはならない。戦え。戦闘においてあなたは対抗者たちに勝利するであろう（上村訳2013：98）。

このような文言を読むと多くの人は、好戦的で

残酷だと感じるであろう。しかしそれを字義通りに受け取らず、まったく異なる解釈を行うことで、正反対の方向に進む原動力となり得る。ガンジーは『バガヴァッド・ギーター』についてこう述べている。

疑念につきまとわれたり、失望に襲われたり、或いは地平線に一条の光も見えぬ時に、『バガヴァッド・ギーター』に向かい、そこに、慰めの一節を見つけると、私はどんなに悲しい時でも、すぐにほほえむ。私の生涯は外面的には悲劇に覆われているが、それが目に見えるものにせよ、見えぬものにせよ、私に何らその痕跡をとどめていないとすれば、それは『バガヴァッド・ギーター』の教えに負う（フィッシャー1968：29）。

同じことが、イスラームの聖典クルアーン（コーラン）にも当てはまる<sup>(3)</sup>。この聖典には異教徒に対する攻撃を命じる句とそれとの共存を命じる句が混在し、イスラーム教徒（ムスリム）の共同体内での解釈の多様性を生み出してきた。

だが、神聖月があげたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい。ひっ捉え、追い込み、いたるところに伏兵を置いて待伏せよ。だが彼らが悔い改め、礼拝を行い、喜捨するならば、道を開けてやれ（9章5節、「剣の句」と呼ばれる）。宗教に強制なし（2章256節）。

和平こそが最も良きものである（4章128節）。

だが彼ら（敵対者）がもし和平に傾いたならば、あなたもそれに傾きなさい（8章61節）。

この二面性の理由は、クルアーンという聖典の

成り立ちに因る。クルアーンの文言は一字一句が神の言葉そのものとされるが、人間に伝えられるには預言者ムハンマドを媒介とする必要があった。つまり彼の口を通して、アッラーの言葉が述べ伝えられたと信じられているのである。よってクルアーンの内容は、ムハンマドの生涯を大きく反映したものとなっている。彼はメッカで570年頃に生まれ、610年頃に啓示を初めて受け、イスラームを説き始めた。その主張は神の前での人間の平等や現世的価値の否定などであったが、これらは当時のメッカ社会への批判であり、彼やその支持者たちは迫害を受けることになる。そしてついに、622年にメディナに移住し、そこでイスラーム共同体の基盤を形成、その後メッカ側もイスラームを受け入れるに至った<sup>(4)</sup>。このようにメッカ期は迫害の時期であり、この時期のクルアーンの句には、メッカの多神教徒批判と一神教であるユダヤ・キリスト教徒への親近感が強く見られる。しかしメディナ期になると、メディナにいたユダヤ教徒との確執が生じ始め、それが句に表れるようになる。ムスリム共同体はその発端から異教徒との対決と共存という二つの主張の間で揺れ続けてきたのであり、その状況がクルアーンに反映され、現在の異教徒観の相違に至るのである。

そこで本稿は、オサマ・ビン・ラディンとフェトフラー・ギュレンという二人の同時代ムスリム活動家を取りあげて論じることにはしたい。前者はアル＝カーイダの創設者であり、911の首謀者でとしてよく知られた人物である。これに対してギュレンは、最近日本でも知られるようになってきたが<sup>(5)</sup>、その知名度は当然ビン・ラディンと比べるべくもない。しかし両者は911をめぐる極めて対照的な発言と行動を展開してきた人物であり、ここではクルアーンの二面性をそれぞれ表す存在としてとらえていく。本論で二人を扱うのは、「イスラーム＝平和」または「イスラーム＝

戦争」という二分法的イスラーム理解は、分かりやすいが現実の適切な把握を妨げるものであり、このようなイスラーム理解は乗り越えられるべきだと考えているためである。イスラームは他の多くの（全てではないが）宗教と同じく、戦争と平和を包含し、その実践はムスリムたちの解釈にかかっているのである。

以上の問題設定に基づき、次にビン・ラディンとギュレンそれぞれの生涯と活動、そして思想と発言に関して、特に911に焦点をあてて論じていく。そして最後にこの議論をふまえ、果たして、非ムスリムがイスラームに対してもつ「宗教＝戦争」イメージは払拭され得るのか、またムスリムは戦争を肯定する思想を乗り越えられるか、について考察してみたい。

## オサマ・ビン・ラディン：異教徒の駆逐

### (1) 生涯と活動

ビン・ラディンは1957年頃にサウジ・アラビアの首都リヤドにて、サウジ・ビンラディン・グループ創始者の息子として生まれた。彼の父が起こしたこの巨大ゼネコン会社はサウジ政府の公共事業を数多く受託し、そこには聖地メッカやメディナの歴史的に重要なモスクの事業が含まれている。彼は貧困層から生まれたテロリストではなく、世界のあり方が自分の思い通りにならないことに憤り、それを暴力で解決しようとした大富豪の息子であった。

サウジ・アラビアは政教一致を追求するワッハブ派を国是としており、極めて厳格なイスラーム国家である。一日5回の礼拝の強制、絵画の排除、宗教警察の監視、男女隔離の徹底などが、他のイスラーム諸国とは比べ物にならないほどの厳しさで実行される。しかし後述するようにこの

社会は大きな矛盾を孕んでいる。彼がこのような国で生まれたことはその人生において大きな意味を持っており、彼の受けた異教徒を否定する教育が、彼の思想の基盤にある。

1979年にビンラディンは大学を卒業し、父の会社に加わったとされる。だがこの年には、イラン・イスラーム革命、エジプトとイスラエルの平和条約締結、そしてソビエト連邦（ソ連）によるアフガニスタン侵略といった時代を画する出来事がいくつも生じた。彼は特にソ連がムスリムの土地アフガンに侵攻したことに憤り、すぐさまこの地に入り、ムジャーヒディーン（ジハード戦士）としてアメリカと共闘することになる。『ランボー 怒りのアフガン』（1988年）という映画はこの時期のアメリカとムジャーヒディーンの共闘を描く興味深い作品である。（ランボーはもちろん、ムジャーヒディーンの側に立ちつつ、アメリカの国益を守るのであるが。）911以降の「ジハード戦士」は「テロリスト」となったが、この時期は共に戦うアメリカの盟友であった。しかし、ソ連が撤退した後、ムジャーヒディーンたちはアメリカから見捨てられる。これこそが、ビン・ラディンがアメリカに対して抱いた憤怒の大きな契機であった。

アフガン時代のビン・ラディンは実際に戦闘に出るよりもむしろ、出自の財力をいかした後方支援に従事していたようである。詳細は分かっていないが、湾岸のアラブ諸国から寄付金を募ったり、父の会社から資材や人材を提供したりしたと考えられる。またアフガンにはソ連のアフガン侵攻に憤った多くの義勇兵がアラブ諸国から集まっており、彼は1984年にパキスタンのペシャワールにアラブ義勇兵が前線に行くための拠点を建設している。さらに1986年からアフガン内国内に自らの軍事キャンプをいくつも建設し、アラブ諸

国の元軍人を集め、彼自身もそこに滞在するようになった。そして1988年には彼の施設が「アル＝カーイダ」と呼ばれるようになる。「カーイダ」とは「基地」という意味のアラビア語で、定冠詞を付けて「アル＝カーイダ」と呼ばれる。この過程で彼はアメリカのCIAと協力したとも言われるが、すでに述べたように、1989年のソ連撤退後はアラブ義勇兵ともども手のひらを返したように見捨てられたのであった。

このアメリカの態度と同様にサウジ・アラビアも矛盾を孕んだ存在であり、それがビン・ラディンの憤りを加速させ、行動に駆り立てることになる。1990年のイラクによるクウェート侵攻の後、アメリカのブッシュ大統領（ジョージ・W・ブッシュ大統領の父）はすぐさま、サウジ・アラビアに米軍の派兵を開始した。これはムスリムにとっては、異教徒のキリスト教徒たちが聖地メッカ、メディナを擁するサウジ・アラビアに進出したということであり、大きな衝撃を与えた。ビン・ラディンもまた米軍のサウジ駐留に憤り、サウジ政府に抗議を行ったが受け入れられなかった。

1992年にビン・ラディンはサウジ政府との関係を悪化させ、祖国を出てスーダンに渡る。この頃から武装活動が始まり、アフガンでの活動を継続させつつ、スーダンやソマリアなどにも元アフガン義勇兵を派遣してネットワークを広げていった。1992年にイエメンのアデンで起こったホテル爆破事件は、彼の関与が確認されるテロ事件の最も古いもので、ここにはソマリアに派兵されるアメリカ兵が滞在していたため、彼らを狙ったものだと考えられる。さらに、ソマリアやサラエボなどにもムジャーヒディーンを送り込み、世界各地のムスリムが関与する紛争に介入、またアメリカのニューヨークで1993年に起こった世界貿易センター爆破事件にも関わっている。1994年にはサウ

ジ・アラビアの国籍を最終的に剥奪された。祖国との関係が公的に立たれたことで、彼のアメリカへの憎悪はより強まっていったと考えられる。

そして2001年9月11日にビン・ラディンを首謀者とするアル＝カーイダのメンバーによって、アメリカ同時多発テロ事件が起こされたことは周知の事実である。この時の彼の発言は次節でとりあげる。彼はこの事件後、アフガンの山岳地帯の洞窟に潜んでいるとも言われたが、2011年5月にパキスタンで米軍によって射殺された。彼の死後もアル＝カーイダは存続し、「アラブの春」によるアラブ諸国の混乱に乗じて活動を展開しているとされる。

## (2) 思想と発言

911の後、ムスリムの宗教指導者たちも様々な声明を表明したが、その多くは911に反対する内容であった。例えばカタール在住で欧米を含む全世界のムスリムたちに大きな影響力をもつユースフ・カラダーウィーや、サウジ・アラビアの総ムフティ（最高宗教指導者）のアブドゥルアジーズ・アールッシャイフ、エジプトのアズハル機構（スンナ派最高学府）の総長ムハンマド・タンターウィーなど、錚々たるイスラーム学者たちがイスラームの寛容を説き、憎悪に基づく暴力行為を批判している（保坂2011：201）。次の章でとりあげるフェトフラー・ギュレンもこの流れに属している。

これらに対してビン・ラディンが911の後に最初に公にした発言は、全く異なる論理のなかで成立している。それは9月24日に、カタールを拠点とするアル＝ジャジーラ衛星テレビ局に送りつけられ、パキスタンのムスリム同胞に宛てた形式で書かれている。911の直後、パキスタン軍がアメリカに協力してビン・ラディン掃討作戦に従事す

ることを発表すると、パキスタン国民がこれに反対、暴動を起こしたが鎮圧された。ビン・ラディンはこの状況をふまえ、彼を支持するパキスタン民衆にメッセージを送ったのである（ローレンス2006：155-157）。

このなかでビン・ラディンは、暴動で殺された人々を「アメリカの十字軍およびその同盟者に攻撃されることに異議を唱え」た殉教者と呼んで讃えている。ビン・ラディンたちは、アッラーのためのジハードの道にあり、それは預言者ムハンマドの教えにそったもので、アメリカとユダヤ人の連合である「十字軍」に対して今後も戦いを続けていく、とも述べている。そして最後にクルアーンから「アッラーが助けてくだされば、お前たちを打ち負かす者は一人もいない」（3章160節）という句を引用している。このように声明のなかで、911は彼らの「反十字軍」闘争の端緒に過ぎないという意志表明がなされている。

このような発想は、1996年のジハード宣言（保坂2003）においてすでに詳細に述べられている。この「宣言」はイラクのクウェート侵攻や湾岸戦争の後もサウジ・アラビアに駐留し続ける米軍、彼の言葉で言う「シオニスト・十字軍連合」を念頭において述べられている。この宣言の冒頭において、いくつものクルアーンからの引用が並べられている。それらはアッラーを讃えつつ、誤りを犯す者を止める必要を説く内容であり、この「誤りを犯す者」は異教徒、特に米軍を念頭においたものである。そして、二大聖地メッカとメディナを持つこの聖なる国からキリスト教・ユダヤ教の連合軍を追い払う必要性を切々と説く。「今日、われわれはこの同じ山やまから、シオニスト・十字軍連合によりイスラーム共同体（ウンマ）に加えられてきた不正を除去するめに努力する」（保坂2003：85）。

さらにビン・ラディンはジハードを行う者が殉教者として樂園に行くことを示唆し、戦うことを命じるクルアーンの句を引用する。

これらの若者たち〔筆者注：テロリスト実行犯たち〕は、おまえたちアメリカと戦うことが、啓典の民〔筆者注：ユダヤ教徒やキリスト教徒〕ではない他の誰かと戦うよりも2倍の報酬が得られることを知っており、おまえたちを殺して樂園に入ることのほか何の望みももっていない。…われらの若者たちはアッラー——いと高くあれ——のみ言葉を詠い、朗誦する。「さ、彼らと戦うがよい。きっとアッラーは汝らの手で彼らを罰し、彼らを辱しめ、汝らを助けて彼らを撃ち、そして信者たちの胸を癒して下さろう。」(コーラン9：14) (保坂2003：99)。…

さらにビン・ラディンは、クルアーンの「剣の句」に依拠しながら、サウジ・アラビアのあるアラビア半島での武力闘争を肯定し、それをジハードだと主張している。

アラビア半島のあらゆる部族にとって、アッラーのために戦うこと、すなわちジハードとこれら占領者から土地を浄化することは今や義務なのである。アッラーは、そこで血が(流されることを)お許しになり、彼らの富が戦利品であることをご存じだ。彼らの富は彼らを殺すものへの戦利品なのだ。至高なるものは剣の章句で仰せになった。「だが、神聖月があげたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい。ひっ捉え、追い込み、いたるところに伏兵を置いて待伏せよ。」(コーラン9：5) われらの若者たちは、聖域を占領された結果、ムスリムが受けた屈辱が爆発とジハード以外では取り除くことがで

きないことを知った(保坂2003：102)。

ではビン・ラディンは、サウジ・アラビアから米軍を追い払った後、何をを目指していたのだろうか。それはポダンスキーも指摘しているように、シャリーア(イスラーム法)に基づき、カリフに統治されたイスラーム国家の樹立である(ポダンスキー2001：13-14)。カリフとは、預言者ムハンマドの代理人であるムスリム共同体の最高指導者のことで、実際のところ歴史的には、オスマン・トルコ帝国がカリフを1924年に廃止してから、この地上には存在しない。純粋なイスラーム国家を復興させるためにビン・ラディンは、イスラームと西洋(ユダヤ教・キリスト教)の全面的戦闘に打ち勝つ必要があると信じていたのである。

#### フェトフッラー・ギュレン：平和構築への貢献

##### (1) 生涯と活動

ギュレンは1941年に東トルコの都市エルズルム近郊の小農村で生まれた。彼の父はイマーム(宗教師)で、彼にイスラームやアラビア語、ペルシア語の基礎を教えた。母もまた密かに村の少女たちにクルアーンを教えたほどの人物で、ギュレンの最初のクルアーンの先生であった。秘密裡にクルアーンを教えなければならなかった理由は、当時のトルコ政府がクルアーン学校などの宗教的教育を禁止し、モスクと公共の場での礼拝のみを認めていたためである。そもそも現在のトルコ共和国は、西洋列強によってオスマン・トルコ帝国が解体された後、ケマル・アタチュルクによる1923年のトルコ革命を経て誕生している。よって今なおトルコは政教分離を国是とする世俗的国家であるが、個人のレベルでイスラームを实践することには何の問題もない。

ギュレンは急激に世俗化・西洋化するトルコ社会のなかで、家庭においてイスラームをしっかり

と学びつつ育った。このことは彼に、西洋とイスラームの間のバランスをとろうとする姿勢を与えたと言えるかもしれない。また彼はイスラーム神秘主義（スーフイズム）についても造詣が深く、彼の思想上にその影響が濃く見られる。幼少時にはカーディリー教団という神秘主義の神秘主義者（スーフイー）の指導のもと、クルアーンを暗唱している。この点も、スーフイーを否定するワッハブ派の国で生まれ育ったビン・ラディンとは対局的である。

1959年にイマームになるための国家試験に合格し、宗教者として公的に勤務を開始した。ギュレンのモスクでの説教や教育活動が評判を呼び、注目を集めるようになった。だがそのために、政府によって、国家の国是である世俗主義を脅かし、トルコを宗教国家にしようと企んでいるとみなされ、1971年に逮捕されて半年にわたる獄中生活を余儀なくされる。しかし1980年代以降、経済の自由化から富裕層が生じ、ギュレンの思想に強い共感を持つエリート層が増加、支持層が膨らんでいった。この頃からギュレンの理念に基づく学校がトルコ中に広まり始め、さらに90年代からは他のアジア諸国や欧米、さらに日本にまで設立されている。こういったネットワークがギュレン運動と呼ばれるようになるが、彼らの自称はヒズメット（奉仕）運動である。

1998年にギュレンはアメリカに移住している。病気治療のためともされるが、実際にはトルコ国内での政治的な理由によるのであろう。だがアメリカに移ったことで、運動はさらに大きな展開をみせる。この運動は、モスクを建設せず、教育施設や文化センターを拠点とすることが一つの特徴である。そうすることで、宗教色を前面には出さず、敷居を低くし、異なる宗教観の対話を促進したいと考えているためであろう。この拠点をもとに、地域コミュニティから政界、学界、マスメディア界といった多岐に渡る活動が繰り広げられ

る（新井2013：193-208、219-236；大川2013：156-184）。

2001年の911以降、むしろその活動がさらに活発になったと言われている。これは彼らの最大の目的が宗教観の対話を通じた平和構築であるからであろう。911という未曾有の文明間の断絶を目の当たりにし、彼らは自分たちの活動の必要性をあらためて認識したであろうことは想像に難くない。イスラームに対する誤解を解き、相互理解を生み出すために世界各地でさまざまな事業を積極的に展開するようになったのである（Esposito and Yirmaz eds. 2010）。世界各地の文化センターでしばしば見られる活動として、断食月に行われるイフタールという食事会への異教徒の招待がある。イフタールは日の入りと同時に、一日の断食を解き、ようやく食事をすることができるといふ、ムスリムにとってはほっとする時間である。ここに異教徒を招待し、共に食事をとることで、なごやかな相互理解が進むと言われている。

## （2）思想と発言

ギュレンは、早くも911の翌日9月12日に、ワシントン・ポストにテロ批判の声明を発表している<sup>(6)</sup>。彼はそこで、いかなる目的があつたとしても、テロ活動は「平和、民主主義、人類、そして全ての宗教的価値に対する最大の攻撃である」としている。よって「誰も、もちろんどのムスリムも、いかなるテロ活動への参加を認められることはない」のである。このようにギュレンの発言はムスリムであることを土台にしつつも、人類全体を念頭においてなされている。続いてイスラームもまた、いかなるテロリズムも認めていないと主張する。

テロリストはムスリムではあり得ず、真のムスリムはテロリストたり得ない。なぜならばイスラームは平和を命じ、クルアーンにおい

て、真のムスリムそれぞれが平和のシンボルであり、基本的人権の保持に協力するよう求められているのである。

このようにギュレンは平和や基本的人権という普遍的な概念を用いてテロ行為を批判しつつ、それがイスラームの枠内でも認められないと主張する。ここで読み取られるのは、非イスラーム的価値とイスラーム的価値を分けることなく、同じ土台に立つ人間として911を批判するムスリム宗教知識人の声であろう。

実際にギュレンの主張は西洋的価値観と相通じるものが多く見られる。彼は政教分離を認め、むしろ聖典クルアーンを政治の道具とみなすことは不敬であると考えている（新井2013：197）。従ってカリフ制の復活も求めてはいない（Abu-Nimer and Yirmaz 2010：No.1089）。また西洋と東洋を分けて考える発想も否定する（Abu-Nimer and Yirmaz 2010：No.1090；Grinell 2010）。彼は、イスラームは今日において個人的なものとなっており、「イスラーム世界などは実際には存在しない」とまで述べている（Gülen 2010：185-186）。これらはすべて、イスラーム教徒と異教徒を分け、後者を駆逐し、イスラーム国家を樹立することに生涯を費やしたビン・ラディンと全く反対の思想である。ギュレンの思想はイスラームに深く根ざすが、全く排他的ではなく、むしろ異なるものとの融和こそがイスラームであるという理解に基づいている。

そしてここに、ワッハーブ派が極端に否定したスーフィズムの影響を読み取ることもできるだろう。スーフィズムとは簡単に言えば、我を脱ぎ捨てて神と合一することを求めるムスリムの宗教実践の大きな潮流である。我を脱ぎ捨てるということは自我（エゴ）の消滅であり、そこから他者を認

め、愛し、寛容になる思想と実践が生まれてくる。

例えばギュレンは、平和はイスラームの基本原則であるとして、クルアーン8章61節「だが彼ら（敵対者）がもし和平に傾いたならば、あなたもそれに傾きなさい。アッラーを信頼しなさい。実に彼は全聴にして全知である」を引用する。この句は、両軍が互いに戦い、血を流した後でも、どちらかが和平を結ぼうとしたならば、ムスリムも感情的にならず、和平に応じるよう命令したものであるという。

従って、戦争や紛争について語ることは、宗教の基本的精神に完全に反している。なぜなら宗教は和平や和解を要求するものであり、それは平和な時のみでなく、戦時においても同様なのである（Gülen 2010：176）。

さらにギュレンはジハードを「大ジハード」と「小ジハード」に分けて考えることを主張するが、これもまたスーフィー思想の系譜に連なる。「小ジハード」は物質的で外面的なものであり、イスラームの義務を果たすことを指す。他方「大ジハード」は内面的なもので、自分のエゴによる否定的な感情や考え（憎悪や妬み、自己中心性、尊大さ）に対する戦争を指す。後者がより困難な戦いであるため、「大ジハード」と呼ばれるが、両者のバランスこそが重要である、と言う（Gülen 2010：171-175）。一般的に知られるジハードとは異教徒に対する戦闘であるが、彼にとってジハードとは、ムスリムとしての日常的な義務を果たした上で、内面的闘争、つまり克己とも言えるような自己鍛錬を積むことを目指すものとなっている。これは前述したガンジーにも通じる発想であり、この論理に基づけば、クルアーンの戦闘を命じる句を己との戦いを意味するものとして解釈することが可能になると考えられるのである。



## おわりに：イスラームと平和の今後

本稿の結論は、旧約聖書学者ノルベルト・ローフィンの主張に一致する。非ムスリムにできることは、ムスリムたちに生じている思想と実践の潮流のなかで、最も暴力を産まず対外的に協調できるものを見守り、支援することである。ローフィンは『平和構築の思想—グローバル化の途上で考える』所収の論文「侵攻と暴力行為」のなかで、ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの宗教が、聖典解釈を通してどれほど政教分離を果たすことに成功しているか、またはしていないか、を論じている。彼もまた、聖典解釈こそが、宗教と暴力行使を分けるための鍵であると考えているのである。そしてこう結論を述べている。ユダヤ教・キリスト教と異なり、イスラームはまだ聖俗の分離という世俗化を終えていない。イスラームは政教一致が根源的な前提にあり、かつ、他の宗教に比べて成立が遅く、まだ若い段階にあるためである。しかし今後、キリスト教が苦勞しながら世俗化を果たした「聖典の合理的解釈という道」を一種のモデルにすることはできるだろう。「疑いなく、何かこの種のことがより良い解決だろう。そしてそうなればたぶん、ジハードという概念もまた、別の価値を獲得するようになるのだろう」（ローフィン2001：142）。イスラームが戦争を肯定する思想を生み出さないためには、その根源的価値基準である聖典クルアーンの解釈を提示し、内部から意識を変革していくしかないと言える。

オサマ・ビン・ラディンは政教一致を追求するワッハブ派の国で生まれ育ち、その矛盾を内面に取り込むが解決することができず、アル＝カーイダ創設と911の実行に至った。この排他的なイスラーム潮流は、相互依存の度合いを急速に強め

るグローバル世界のなかで生き残れないことは明らかである。しかし苦勞して世俗化の過程を進めているトルコに生まれ育ったフェトフッラー・ギュレンは、非ムスリム世界と積極的に関わり共存することこそがイスラームの本質と考え、この思想に共鳴する人々はグローバル化の波のなかで活躍の場を増やしている。両者ともクルアーンの教えに基づき、祖国を追われながら国際的ネットワークを展開してきた人物であるという共通点はある。だがどちらが今後のムスリムの取るべき方策であるかは明らかであろう。

報道によって伝えられる、戦争や紛争のイメージは強力である。多くの非ムスリムが持つ「イスラーム＝戦争」という認識を払拭するためには恐らく、世界各地で非ムスリムの良き隣人として腰をすえた関係を継続していくしかないであろう。その意味でもギュレン運動の活動は一つのモデルになるかもしれない。非ムスリムにできるのは、「これを期待し…、この目標が〔宗教としてのイスラームの〕実質の喪失なしに達成可能だと考える前衛的な人々に、可能な限り助力を提供」（ローフィン2001：141）することである。つまり「イスラームは好戦的だ」と断定した目で見るとはならず、イスラームのもう一つ別の可能性に注目し、ともに平和構築にたずさわることが必要なのだと考えられるのである。

## 註

- (1) 例えば町田2004など。
- (2) 中国では人口の2%、カンボジアではその3-5%程度をムスリムが占めているとされる。
- (3) 現在入手できるクルアーンの日本語訳は以下の四点である。井筒訳1964、大川訳2009、藤本他訳2002、三田訳1982。クルアーンに関しては、大川2004やクック2005を参照。

- (4) 預言者ムハンマドに関する最も重要なアラビア語古典文献である、イブン・イスハークのムハンマド伝の日本語全訳が刊行され、彼の生涯に関連する伝承を詳細に知ることができるようになった(イブン・イスハーク2010-2012)。
- (5) 新井2013や大川2013など。
- (6) <http://www.guleninstitute.org/news/97-gs-condemnation-message-of-terrorism.html> (2013年9月20日アクセス)

### 主要参考文献

- 新井政美 2013。『イスラームと近代化 共和国トルコの苦闘』講談社。
- 井筒俊彦訳 1964。『コーラン』(全3巻、改訂版)、岩波書店。
- イブン・イスハーク 2010-2012。(イブン・ヒシャーム編註、後藤・医王・高田・高野訳)『預言者ムハンマド伝1-4』、岩波書店。
- 上村勝彦訳 2013。『バガヴァッド・ギーター』岩波書店。
- 大川周明訳 2009。『古蘭:文語訳』(全2巻)、書肇心水。
- 大川玲子 2013。『イスラーム化する世界 グローバリゼーション時代の宗教』平凡社。
- 2004。『聖典「クルアーン」の思想 イスラームの世界観』講談社。
- クック、マイケル 2005。(大川玲子訳)『コーラン』(<一冊でわかる>シリーズ)、岩波書店。
- フィッシャー、ルイス1968。(古賀勝郎訳)『ガンジー 二十世紀の大政治家』紀伊國屋書店。
- 藤本勝次・池田修・伴康哉訳 2002。『コーラン』(全2巻)、中央公論新社。
- 保坂修司 2011。『新版 オサマ・ビン・ラディンの生涯と聖戦』朝日新聞出版。
- 2003。「オサマ・ビン・ラディンの対米ジハード宣言」『現代の中東』35:80-108。
- ポダンスキー、ヨセフ 2001。(鈴木主税訳)『ビンラディン アメリカに宣戦布告した男』毎日新聞社。
- ローフィンク、ノルベルト 2001。(戸田聡訳)「侵攻と暴力行為—ユダヤ教、キリスト教、イスラームの聖典(成立時の文書)に見る—、マティアス・ルッツ=バッハマン、アンドレアス・ニーダーベルガー編著(舟場保之・御子柴善之訳)『平和構築の思想 グローバル化の途上で考える』(梓出版社、2001):121-142。
- ローレンス、ブルース 2006。(鈴木主税・中島由華訳)『オサマ・ビン・ラディン発言』河出書房新社。
- 町田宗鳳 2004。『なぜ宗教は平和を妨げるのか』講談社。
- 三田了一訳 1982。『日亜対訳・注解聖クルアーン』(改訂版)、日本ムスリム協会。
- Abu-Nimer, Mohammed and Yirmaz, İhsan 2010. “Islamic Resources for Peacebuilding: Achievements and Challenges,” in Esposito and Yirmaz eds. 2010: No.892-1400.
- Esposito, John L. and Yirmaz, İhsan eds. 2010. *Islam and Peacebuilding: Gülen Movement Initiative* (Kindle 版), New York: Blue Dome Press.
- Grinell, Klas. “Border Thinking: Fethullah Gülen and the East-West Divide,” in Esposito and Yirmaz eds. 2010: No. 1410-1746.
- Gülen, Fethullah 2010. *Toward a Global Civilization of Love and Tolerance*, Clifton: Tughra Books.